

---

# コミュニティと**集団精神療法**

( 1 )

藤 信子

ここ数年大学院生とエルサルヴァドルの1980年代の内戦時代に書かれた論文を読んで、「心理療法が始まるまで(9)」に私に、仕事と人の発達について考えさせてくれたことを書いた。30年以上も前の論文、そして言語はスペイン語だったものの英訳版を、今頃読んでいるのはいくつかの理由がある。始めに、この Martin-Baro の論文集 “Writings for Liberation Psychology” (1994) を手に取ったのは、私自身が近頃の PTSD に対する医療の世界の捉え方に充分納

得していない(「心理療法が始まるまで(5)」)ところからだった。Orford(2008)のラテンアメリカの解放の心理学について書かれた箇所に出会い、欧米の従来の PTSD を「医療化」「個人化」する考え方ではない方向に関心を持った。そして Martin-Baro の論文を少しずつ読む中で、エルサルヴァドルのそして多くのラテンアメリカ諸国の80年代の状況を考える時に、却って私たちの国、社会の特徴が見えてくるという体験をしている。

例えば先日読んでいたのは、当時のラテン

アメリカの労働の社会的配分は、現実の秩序を定義し、そして法制度を支配階級のニーズに合わせて作られていること、また雇用体系が社会階級の地位に結びついているということだった。社会階級という概念自体が、現代の日本人にとってなかなか分かりにくい上に、社会的階級と仕事が固定する、というのはどのようなイメージかと言う話になり、院生から江戸時代の「士農工商」みたいなものだろうか？とか資本家が生産手段を独占し、労働者を搾取して余剰を産むことを考えたら良いだろうか？という質問があった。私のイメージでは、「士農工商」は武家が作った社会制度を維持するためであり、武士が生産手段を管理はしていても、全てを所有していた訳ではない。そもそも武士階級もその制度の中で管理されていたのだと思う。西欧の資本家の出現・資本主義社会の成立と、ラテンアメリカがスペイン、ポルトガルによって植民地とされ、征服した宗主国の子孫が先住民を抑圧して経済手段、政治魔で独占していたような体制は、少し違うような感じに見える。論文を理解するために、そのような話をしていくうちに、それぞれの社会の特徴が少し見えて来るような気がする。社会体制を理解するとまでは言えないが、自分の住んでいる社会が私たちの行動に影響を与えているということを実感できるのはこのように社会制度の違う国のことを見る時に可能になることがあるのだと感じる。

私にとって、自分のいる社会を相対化して考える機会になっているから面白い。

私たちを取り巻く社会について考える方法については、いろんなやり方が考えられるかも知れないが、私はグループで話し合う（集団精神療法）方法を実施する中でも自分と（その意識と）社会との関係を考えている。個人は、自分の中で家族、地域、文化の中の対人関係の歴史を受け継いでいると同時に、現在の個人を取り巻く職場、仲間、地域社会、政治などと相互に関連し合っている。そして集団精神療法というのは、この対人関係の歴史（「内のグループ」）と取り巻く社会的環境（「外のグループ」）を語り合っていると私は考えている（藤 2011）。集団精神療法は精神療法であるから、自分が苦痛、悩みを感じていることについて話し合うのだけれど、私の場合はいろんな話をしながら、自分の社会的な環境との関係や、自分の中で受け継ぎ作ってきた関係の特徴を見ることで、自分の苦痛、悩みについて見ることができる。もちろん、そこには安心して話せるための構造が必要だけれど。

私たちの行動が、社会環境との相互作用との中で成立しているということ、どのように見ることができるかという方法論については、短いスパンで考えることができるのは、行動分析の三項随伴性を見ることができよう。しかし、行動のスパンの長い場合や広い場合は、実験をから考えるこの方法では難

しい。環境、制度と個人の行動、意識との関係を考えることは、PTSDの予防やケアにも通じると考えられるが、グループで話すというアプローチは、それを可能にすると考える。

Martin-Baroは、イエズス会の神父であり、ラテンアメリカにおける解放の神学の実践をする中で、労働者や農民の苦しい生活からの解放と言う視点から、心理学のあり方も見直した。論文を読むと、自分の見る視点は、社会のどの部分を見て考えているのかについても、考える必要があることを教えられる。コミュニティ心理学者は改革者であるように、と言われるが、誰と立場を共有しようとしているのか自覚することが大事なのだと思う。自分の研究や臨床が基づく理論が、どのような対象の在り方を基礎として見ているのかに

自覚的であるために、これから時々事例も見ながら、社会的相互作用をどのようにとらえているか、そしてそれはどのような立場から見ているのか、についてこの欄で考えていこうと思う。

#### 文献

- 藤 信子 (2011) 私の・外のグループ、内のグループ. 集団精神療法 27 (2) 112-118
- Orford, J. (2008) Community Psychology, Challenges, Controversies and Emerging Consensus. Chchester, Wiley
- Martin-Baro, I., Aron, A. and Corne(ed.), Writings for Liberation Psychology. Cambridge, Harvard University Press.